

「巻頭特集」 株式会社松屋カメラ

# この街の思い出を 映して一世紀

ライカ、ニコン、キヤノン……。カメラ好きにはたまらない、クラシックの名機から最新のデジタルまでカメラが並ぶ。松屋カメラは明治37(1904)年に中区住吉町で創業後、移転や業態を変えながら営業を続けてきた。取締役社長の松谷信敏さんにカメラの魅力を尋ねる。



今池商店街連合会の主催で、商店街の古い写真を飾り、道行く人々が当時を偲んだ(写真は戦前の松屋カメラ)



松屋カメラの社員はカメラ愛好家ばかり



エンジニアのオスカー・バルナック氏が中心になって作った「ライカM3」

シャッター速度の設定が手軽にできる「コンタックスIIIa」



information

## 株式会社 松屋カメラ

名古屋市千種区内山3-33-11  
TEL 052-732-1211

### 思い出を形に残しながら 地域で愛されて110余年

客層は20〜40代が多く、女性一人や親子三代での利用もある。「対面販売の際、お客さんの目を見て接客するよう心がけています。一人のスタッフが一人の顧客に付き添えるのは、個人店だからこそ」と誇らしげ。女性客には「二眼レフカメラが人気で、「撮影が面白そう」と購入していく場合が多いそうだ。「松屋カメラでは、新品と中古カメラ両方を販売しています。中古となると二点ものもあるんです。来店されて心惹かれるカメラと出会い、購入しようと決心して二度目の来店をされるも、30分前に売ってしまったというケースがあります」と、毎日がドラマチックだ

ともに、さまざまな出会いを楽しんでほしい。

人生の伴侶であるカメラと

### 写真が貴重だった時代 兄弟が守り抜いた家業

「祖父が兄弟二人で創業した「松谷写真館」が始まりだと聞いています。カメラ専門店は今とは異なり、写真館としての営業でした」と松谷信敏社長は話す。

現代では、スマートフォンやコンパクトデジタルカメラを片手に、誰でも気軽に撮影を楽しめる。しかし、創業当時はカメラ自体が珍しく、周辺にも写真館は少なかった。写真は七五三や成人式など、人生の大きな節目に家族がそろって撮影する、特別なものだったと松谷社長は目を細める。祖父らの跡を継ぎ、信敏さんの父・正男さん兄弟が二人で写真館を続けた。その後、昭和9(1934)年にのれん分けし、正男さんが今池の現在地に「松屋写真機店」を開業。「昔のカメラは今と違って大きくて重たく、撮影の際には三脚の取り付けが必要でした。その脚に登ってはよく怒られていましたね」と、当時の思い出を懐かしそうに話す。



対面販売を重視。一人ひとりの希望に合うカメラを勧める

第二次世界大戦を過ごした幼少期の記憶も、心に刻まれている。「当時の店の前の広小路通は路面電車が走り、線路の切り替えは地下室にある機械



店内の両壁にはカメラが所狭しと陳列されている

と笑みを見せる。

たびたびフランスなど海外を訪れては、撮影をしてきた松谷社長。傑作はめったに生まれませんというが、複数の写真を組み合わせて飾ることが自己表現できるところが、カメラの面白みだという。「特にフィルムカメラは、シャッターを押す時、「カシャッ」と独特の音が鳴って快い。今は色々な大きさのカメラがありますが、ポケットに忍ばせられる小型カメラが丁度良いですね」。これまでに合ったさまざまなカメラを思い出しながら、心を躍らせる。

今年から専務取締役に就いたのは、松谷社長の甥、松谷常弘さん。前職の新聞社での経験を生かし、ベテランの社員とともに叔父を支える。「初めて自分のカメラを手にした



1994年に販売が開始されたという「ハッセルブラッド501C」(左)と、6×6判の二眼レフカメラ「ローライフレックスT」(右)

で行われていました。その地下が防空壕として使われていたんです。空襲の頃合いを見計らって地上に出た時、遠くの空が赤く燃えていた風景は、ずっと脳裏に焼き付いています」。戦争を乗り越え、昭和25(1950)年に「松屋商店」へ名を変え、37年、松谷社長が店を継いだ。さらに43年には「株式会社松屋カメラ」に商号を変更。祖父、父と同じく兄と二人三脚で店を切り盛りしてきた。手先が器用な兄はカメラの部品を検査するなど技術面に秀でており、松谷社長は撮影を得意としていた。「昭和の時代も名古屋駅周辺と栄、今池のあたりは繁華街として栄え、仕事帰りに飲みに行くなんて時もありましたね」と会社経営の船出をした当初を振り返る。



取締役社長  
松谷信敏さん  
全国大会の写真展へ応募する時があるという。松屋カメラの店内には、松谷社長が撮影した写真が飾られている



専務取締役  
松谷常弘さん  
4年前に新聞社を退職。フィルムとデジタルカメラのどちらも愛用し、店を訪れた人へアドバイスを送っている

のは中学3年生の時。何回も撮影することで、だんだんと映し出される世界が変わっていきます。自分の思い描く世界が撮影できるようになった時は、とてもうれしく思いました」。今後の目標は、色々な人がより楽しめる商品を集めること。客は、そこで出会った相棒のカメラを片手に近所を散策する。通い慣れた道でも、一本外れれば異なる景色が見られるだろう。「旅心を常に持つてほしい」と松屋カメラの社員はほほ笑む。

人の数だけ、思い出がある。株式会社松屋カメラは、その一人ひとりの思い出に寄り添いながら、今日も店へ訪れる人を温かく迎える。「カメラは人生の伴侶ですから」と答えた松谷社長の笑顔は輝いていた。